



ひとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

有為 UI TENPEN 転変

志高く、龍馬スピリッツ
「育成」を目指して



原発、戦争、改憲：国のいや大げさではない地球の存亡をかけた問題噴出と言っても過言ではない昨今、それだけ波乱含みの平成26年の予感である。自民党の数で押し切る秘密保護法案の成立など、まさに風雲急を告げている状態と言えよう。龍馬記念館への入館者の皆さんが残されていく龍馬への手紙「拝啓龍馬殿」やアンケート



本年もよろしくお願ひいたします

この現状を背景に館では、龍馬スピリッツ「発信」を心がけてきた館の方針を、今年は一歩前進させ「育成」という風にスタンスを広げた。「発信」から「育成」。龍馬は人との出会いを仲間を大切に、志高く、行動した。さあ、一人ひとりが龍馬を目指し龍馬を目標に前進しよう。

にもその現 状がはつき り記されて いる。状態 を憂い、不 安がる声と ともに「今、 龍馬が生き ていてくれ たら」「龍 馬に見せる のが恥ずか しい現実 だ」「21世 紀の龍馬の 出現が不可 欠」など後

職員一同

龍馬の先を駆けた「天誅組の変150年」展

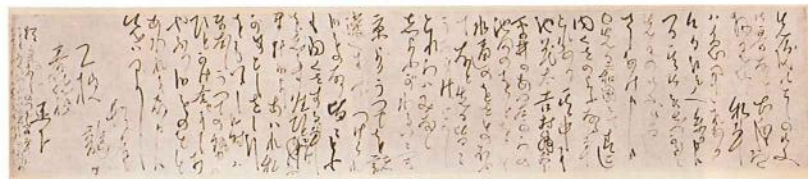
会期 平成26年1月25日(土) ~3月31日(月)

本年度最後の企画展は「天誅組の変150年」展である。文久3年(1863)、吉村虎太郎らが率いる天誅組が、大和の地で挙兵してから150年を迎えるにあたり、多くの土佐出身者が参加したこのできごとを振り返る。

文久3年(1863)8月、孝明天皇の大和行幸に呼応し、攘夷を実行するため拳兵した天誅組の一軍は、公家の中山忠光を主将として大和に向かい、五条代官所を襲撃して代官らを殺害した。ところが京都で八月十八日の政変が起きたため行幸は中止となり、天誅組は孤立無援となった。その後も戦いを続けたが次第に追い詰められ、9月末には中心メンバーであった吉村虎太郎、藤本鉄石、松本奎堂らが相次いで戦死・自刃した。落ち延びた者はごくわずかで、追手に捕らえられた者の多くは、翌元治元年に京都で処刑された。

攘夷親征の先駆けをめざしたと呼ばれるこの事件には、吉村虎太郎のほか安岡嘉助、那須信吾、池内蔵太、伊吹周吉(のちの石田英吉)など、多くの土佐浪士が参加していた。残された資料は少ないが、そのなかから「天忠組 出発の図」(明治32年筆の原図よりの複製、津野町教育委員会蔵)、天誅組の変を題材にした芝居「大和錦朝日旗揚」の役者絵(早稲田大学演劇博物館蔵・パネル展示)などを展示したい。

亀尾 美香



文久3年秋頃 乙女宛龍馬書簡(真物)

天誅組の変に言及した龍馬の手紙。池内蔵太、吉村虎太郎、土居佐之助、上田宗兒ら、戦に参加した土佐出身者について触れている。

妻 眞喜子が語る

「作家・宮地佐一郎の思い出」④

『出会いの妙味』

聞き書き



『坂本龍馬全集』(光風社出版発行)

大佛次郎との出会い

宮地佐一郎を語るのに作家・大佛次郎(1897~1973)を忘れてはならない。佐一郎が大佛に出会ったのは、大佛が作家として大成し、長年の直木賞選考委員を務めていた頃だ。

「大佛先生は私たちにあって雲の上の存在でした。おそれ多くて手が届かないような……。大衆文学からノンフィクションまで多くの作品を書かれていましたよ。その大佛先生の方から佐一郎さんの手を差し伸べてくださったのです。」

「始まりは、出版した『野中一族始末書』(1963、審美社)をお送りした頃からだったかしら。昭和38年、佐一郎は同著を送り、大佛は「心のこもった良い作品」だと丁寧な手紙を寄せた。以後、佐一郎は大佛を師と仰ぐ。同じ師でありながら、評論家・亀井勝一郎とは家庭的な兄弟のようなきあいだだったというが、大佛とはいわゆる師弟の間柄だったようだ。

「先生は『人を知れ!』とおっしゃっていましたね。大佛は佐一郎を育てようと、様々な人を紹介した。その中に、後に『坂本龍馬全集』を発行した光風社書店社長・豊島淑氏との出会いもあった。

大佛は、「宮地佐一郎の文章が賞向きではない」という講評は、宮地を批判する形で私を批判している」「作品が悪いというよりは、選者に作品を理解する力がないのだ」と言った。佐一郎は、「もう賞はもらわなくてもいい。大佛先生がこれだけ言ってくれたのだから」と応える。



初めての直木賞候補作品『關鶏図』出版記念会(1964年)の受付と、会の様子。夫妻を囲んでスピーチする大佛次郎(左)と亀井勝一郎(右)が写った貴重なショット

大佛と出会って後、佐一郎は精力的に文芸作品を書いていく。昭和39年(1964)には『關鶏図』(七曜社、昭和45年(1970)『宮地家三代日記』(光風社書店)、翌年『菊酒』(光風社書店)と続き、これら3作品はそれぞれ直木賞候補となった。しかし、3回も候補に上りながら、佐一郎は直木賞を逃した。「大佛先生は、本人以上に悔しがっていましたね」と、眞喜子。

直木賞候補作家から龍馬研究者へ

そんな頃だった。大佛は、佐一郎に「龍馬を書いてみたら」と勧めた。佐一郎の中にある土佐への思いはもちろん、光風社書店・豊島社長が、龍馬と親しかった長府藩・伊藤九三の子孫に残る龍馬資料『伊藤家文書』の写真撮影を行っていたことも大きかった。「坂本龍馬全集」発刊への始まりであった。

昭和47年(1972)ごろから、佐一郎は修羅のように5年余りに及ぶ龍馬研究に没頭して行った。亀井はすでに鬼籍に入っていた。大佛は、幕末維新を描く新聞連載『天皇の世紀』を6年にわたり書き続けており、その高知取材には佐一郎も同行した。しかし、大佛に病魔に倒れ、『坂本龍馬全集』を

見ることはなかった。それだけではない。「応援してくださった光風社書店の豊島さんも出版記念会の直前に突然亡くなられました。本当に残念でした」と眞喜子は目を伏せた。佐一郎のいう「鎮魂の書・龍馬全集」は、幕末志士たちだけでなく、恩師や関係者への鎮魂の書ともなったのである。

「口を開けば、龍馬、龍馬でした。龍馬にとりつかれているのじゃないかと思うくらい」と語る眞喜子もまた土佐人である。

「何と言っても龍馬の手紙は面白いですね。あるとき佐一郎さんは、若い龍馬が書いた手紙(※注安政5年7月頃・乙女宛)の解釈に困っていました。『しよう婦』を娼婦と訳したのですが、どうもおかしい。そこで私が、それは『葛蒲』ではないの、と言ったら、つじつまが合いました。私も少しは役立ったみたいですよ」と嬉しそうに語る。

眞喜子の支援なくして全集は完成しなかっただろう。(文中敬称略)

■大佛次郎(1897~1973) 横浜生まれ。暮らした鎌倉をよく愛した。小説『鞍馬天狗』『赤穂浪士』で一世を風靡する一方、「バリ燃ゆ」や「天皇の世紀」(未完)などシリアスなテーマにもライフワークとして取り組んだ。昭和39年(1964)、文化勲章受章。横濱市には「大佛次郎記念館」がある。昨年は没後40年にあたり、同館では今年3月まで特別企画展を開催中。

■光風社書店は、『坂本龍馬全集』増補改訂版(1980)から光風社出版に。

前田 由紀枝

学芸員の視点 積年の課題に着手

龍馬記念館リニューアル検討委員会始まる 名実ともに龍馬の殿堂を目指し



三浦夏樹学芸員

展示や収蔵を行うには最悪

平成3年に開館した当時は、資料が少なく、展示環境も博物館として不十分だった。しかし、来館者からは「本物の資料を見たい」という要望が年々増え、それに応えるために少しずつ環境を整備してきた。

私が館に勤め始めたのは、平成10年4月からで、当館にとっては初めての学芸員採用だった。当館の展示室は、温湿度管理ができず、ガラス張りの建物で紫外線が入り放題。消火設備は未熟。海辺で潮風の影響も受ける。密閉型の展示ケースも無く、収蔵庫もない。周辺の地面は亀裂が多く、地震での崩壊が心配された。このように、資料の展示や収蔵を行うには最悪だったが、太平洋の眺めは最高で、龍馬に思いを馳せるにはこれ以上ない場所だと感じていた。

この館でどうやって資料を収蔵・展示すれば良いか、私は随分悩んだ。四国の歴史系博物館や文書館の人たちが集まる会で、多くの人に相談したり、平成13年に高知県内の博物館が集まって10館連携展示を行った時も、当館の収蔵・展示はどういう方向を目指すべきか尋ねたりした。

徐々に改善は行ってきたが……

経験豊富な学芸員の方々が知恵を絞ってくれても、現在の建物では根本的な問題の解決は不可能という答えだった。細かい点では良いアドバイスを頂き、徐々に改善を行ってきた。



三浦学芸員の説明で企画展示室を見る検討委員

12月3日、高知県は龍馬記念館の第1回リニューアル基本構想検討委員会を開催した。長年、訴え続けてきた要望がようやく受け入れられ、検討が始まったのだ。

検討委員には、京都国立博物館の宮川禎一氏や、高知市職員で高知市文化プラザのぼーとや新図書館建設に携わってきた筒井秀一氏、高知大学で保存科学を専門に研究されている特任准教授松島朝秀氏などをはじめ、観光や建築の分野からも専門家が入っていた。

このアドバイスに添って今まで館を整備してきた、開館当初に比べれば遙かに安心して展示・収蔵ができるようになったが、まだまだ博物館としては不備が多い。到底、京都国立博物館が所蔵する重要文化財の龍馬資料などは展示できない。

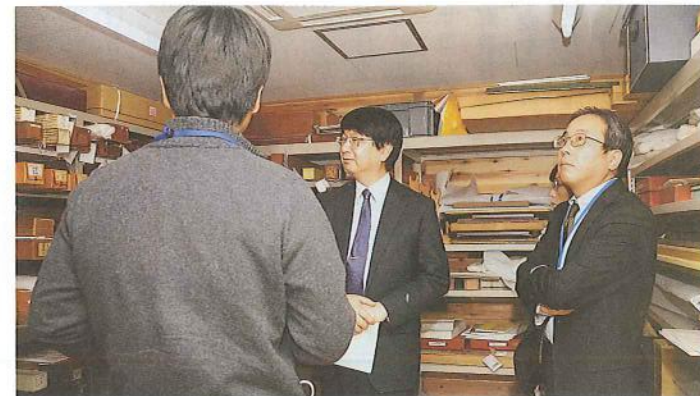
理想は高く

結局、当館のあらゆる問題を解決するには、大改修を行うか、別館を建てる以外にない、という答えに至っていた。今回のリニューアル検討委員会は、この点を検討するもので、完璧な博物館を目指す。龍馬関係資料は必ず後世に伝える義務がある上、近い内に発生する南海大地震も乗り越えなければならぬ。完璧な博物館になればこれらもクリアできるし、重要文化財でも借りて展示できるだろう。県の予算の問題はあるが、理想は高く持って、来館者が満足できる館、資料の寄贈・寄託者が安心できる館を目指したい。そして、龍馬のことなら何でも応えられたいと思う。

(主任学芸員・三浦夏樹)

坂本龍馬記念館リニューアル基本構想検討委員会 委員名簿

氏名	所属及び職名等
宮川 禎一 (委員長)	京都国立博物館 学芸企画室長
筒井 秀一 (副委員長)	高知市教育委員会参事 民権・文化財課長事務取扱 (併) 総務部市史編さん担当参事
松島 朝秀	高知大学 特任准教授
川久保 哲	高知県観光コンベンション協会 誘致部長
古谷 純代	高知市旅館ホテル協同組合 女性部長
川北 恭弘	高知商工会議所青年部 会長
須内 宗一	高知市商工観光部 副部長
井上 博敏	高知県土木部建築課長



収蔵庫に入って説明を受ける宮川氏(中央)



県道封鎖。無事つながりました

龍馬精神で前進!

桂浜の龍馬像から坂本龍馬記念館前のシェイクハンド龍馬像までおよそ540メートルを人の握手でつなぐイベント「レッツゴー! ハンドインハンド」を手をつないで前進しようよ」が11月17日(日) 早朝行われた。昨年に続いて2回目である。全国の龍馬ファンが参加して615人の「人の鎖」が見事完成した。つながった瞬間、桂浜は一瞬シンと静まり波音が聞えた次の瞬間、歓声に包まれた。

この日、午前7時前から参加者が集まり始めた。ペビーカーに乗った生後2カ月の赤ちゃんから、90歳を超えた地元のおばあちゃん。北海道をはじめ県外から参加の皆さん。大人も子どもも年齢などは関係なし、見知らぬ皆が午前8時30分、今年615人の「手」と「手」が3分間一本につながった。

手と手がつながるとは、人と人がつながること、心がつながること。龍馬のように「志」がつながって、伝わって、みんなで一歩前進するパワーが生まれるのを感じていただけたのではないかな。

そして、記念品の相談に乗ってくれた方、スタッフをつとめてくれた方、参加者をつとめてくれた方、当日の地区放送を聞いて駆けつけてくれた地元の方々などたくさんの方々が生まれました。これからも出会いを大切にどんどんつながって広がっていく記念館でありたい。そして「志」もまた大きくなっていく。

ありがとうございます。

岩本 佐代



龍馬像前では坂本家9代目坂本登さん(右端)、女優小林綾子さん(中央)も



シェイクハンド龍馬像とつながったのは中澤教育長



元気いっぱい、ちびっぴりようまさん



葛島保育園りようま組も勢ぞろい

盛り上った朗読コンサート
女性が紡ぐ龍馬さん 出演者と観客が一体となって

いに龍馬を盛り上げた。

今年11月の「龍馬月間」は15日の龍馬生誕祭から17日の「桂浜龍馬まつり」までの3日間を中心にイベントを組んだ。その中で、地域を変えながら3日連続で開催した龍馬の手紙を読む朗読コンサート(安田町文化センター・赤岡町弁天座・高新RKCホール)は各地で好評、大

女優の小林綾子さんが「乙女ねえやん」になって龍馬からの手紙を読むこの基本スタイルは守りながら、より分かりやすくを念頭に新たなアレンジに挑戦した。題して「女性が紡ぐ龍馬さん」。女性にモテた龍馬さんをイメージし前面に出した。小林さんを中心に、月琴(永田斉子)ピアノ(福田明子)甚句(小学校教頭 川崎弘佳)解説(龍馬記念館職員 西本有里、尾崎由紀)の6人の女性である。

達人な土佐弁を披露

幕開きは川崎先生の哀愁おびた甚句(安田では竹内土佐郎先生)。龍馬が妻のお龍にも習わせたと言われる月琴が不思議な音色で観衆を幕末に誘い込む。と、福田さんのピアノは日本の叙情歌「叱られて」「ふるさと」「赤とんぼ」「埴生の宿」など誰もが記憶の奥にとどめている愛唱歌だ。そして小林さんの乙

女ねえやん」の登場である。あっさり客席の中にも入っていく。また、今回はただ一通残っている妻のお龍に宛てた手紙もあり、一瞬、お龍も演じてみせた。

朗読は静かに聴くというイメージがあるが、龍馬の手紙は違う。「エヘン エヘン」とか「ぶんと屁のなるほど」など面白い言葉がたくさん出てくる。また、妻のお龍が女郎に売られた妹を取り返しに行ったことを説明した手紙には、単なる朗読とは異なる緊迫の雰囲気、観客の皆さんのため息や笑い声も混じった。とにかく回を重ねて小林さんの土佐弁がこじやんと上手になっていった。最前列で目に涙をためる観客の姿に気付いた解説員が逆に感動して解説をとちるといったハプニングも起きるなど、終始出演者と観客が一緒に盛り上げたコンサートになった。

尾崎 由紀

華麗なるコラボレーション
幻想的別世界を演出

坂本龍馬生誕日、11月15日夜のメインは、手筒花火、よさこい、津軽三味線の共演であった。手筒花火は本場、静岡県三ヶ日町から今年3回目、共演のよさこい踊りは地元の「桂浜・龍馬プロジェクトせよ」チーム。そしてもう一組、津軽三味線が加わった。

午後6時30分スタートはまずよさこい踊り子隊が華麗に舞った。ちょうど中天に満月である。明るく桂浜を演出する。「ザブーン、サラサラ」繰り返す波音が神秘的にさえ聞えた。アカペラで歌うよさこい節が流れ出すのを待っていたかのごとく花火師達が登場。直径約30センチ高さ70センチ以上の手筒花火を抱きかかえ、それぞれの位置に。掛け声をきつかけに、「シューワッ!」と白い煙と細かい火花が夜空を照らした。桂浜の竜王岬がくっきりと浮かび上がる。火の粉を浴びる花火師達。その勇姿を背に津軽三味線の演奏が「ビビン、ピンピン」。観客から「わあっ!!」「すごい迫力っ!!」と歓声が上がった。

津軽三味線の音色に合わせるかのよう次々と火花が打ち上げられ、桂浜がまるで違う時間が流れている別世界のような幻想的な空間になった。

緑起もの手筒は、抽選で参加者の皆さんに。満月はあくまでも空高く人影が消えると波音は急に高くなった。

西本 有里



小林綾子



福田明子



永田斉子



川崎弘佳



西本有里



尾崎由紀



拜啓 龍馬 殿

平成25年9月21日〜12月20日

126通

りょうさん！また会いに来ましたよ！生きていくのもなかなかどうして辛い事も多い世の中ですが、初めてここを訪れた時に、貴方の分までこの世の中をしっかりと見つめて行こうと誓ったのですが、負けそうな私にもう一度奮起させていただきに参りましたよ。そしたら多くの貴方のファンが「こじやんと」いらっしやう、みんな目を輝かせていました。まだまだわが国は希望に溢れていると感じましたよ。貴方に会って、私の見た事を沢山話すのは当分先になりそうですが、楽しみに待っていてくださいね。また来るき！ほいたらっつ！その時まで！

(9月22日) 広島 Y・N 49歳 女性

「龍馬がゆく」全8巻を読んでから高知へ来ました。海を見て立つ龍馬像、シエイクハンド像もいいですね。高知のみなさんはとてもあたたかく接してくれました。また来たいと思います。ブログで旅行記を書いています。高知のことも書きますね。

(9月30日) 埼玉 U・H

坂本龍馬様、こんにちは。お元気ですか？今日も雲の上で駆け回っておられるのでしょうか？僕は大学最後の夏休みの課題として、自転車て京都からやっ

てきました。車では気分が良くないような風景を見たり、その土地その土地で暖かい人達と出会って、この旅に出て本当に良かったと思います。この旅をしているおかげで少しは逞しくなったんじゃないかと思えます。龍馬さんも江戸への旅で大きく成長されましたよね。男は旅をすることで、大きくなるのかもしれない。こんな旅ができるのも豊かな国、日本を目指した龍馬さんの想いがあってこそです。ありがとうございます。お元気で。

(10月7日) 京都 Y・T 21歳 男性

北海道出身の私は坂本さんの血の流れをくむ方々の足跡を知っています。六花亭の絵を描いた直行さんなど沢山の有名人を輩出していますね。先日、中学の友人がアメリカから一時帰国したので会いまして、互いに先祖の話をしましたら、その方のおばあちゃんまが直寛さんのお子さんの一人だったとこのことで、浦臼で生まれた方でした。私のまわりにつながる方がいらして不思議です。あなたさまが願った「今一度に日本を洗濯したいところ」は叶えられると信じています。どうかお守りください。

(10月11日) 神戸 M・M 55歳 女性

してありました。私は龍馬さんの生き方が好きです。憧れの気持ちでささ抱えています。龍馬は19歳で江戸へ遊学したと資料で読んでいたことがあり、私は18歳のうちに高知へ行きたいという願いがありました。そして私は今、桂浜の景色を18歳の瞳で見えています。来月は生誕、そして命日ですね。高校生になってから毎年11月15日にお墓参りに行ってきます。来月で4度目になります。私もいつか龍馬さんのように大きなことを成し遂げたいです。

(10月16日) 大阪 M・K 18歳 女性

龍馬さんがもつと長生きしていたら、どんな思いで行ったかしら。また龍馬さんがどのような日本を変えていったかな色々と想像がふくらみます。桂浜で波の音を聞きながら龍馬さんに思いをめぐらしているとタイムスリップしそうです。

(11月3日) 愛媛 H・M 53歳 女性

僕は今仕事で一人桂浜に来ました。一人で海岸を歩き、龍馬さんを見て、僕も龍馬のようにB-I-Gな人物、皆から尊敬されるぞと思えました。今度は家族三人(母・兄)で龍馬さん宛ての年賀状を見に絶対来ます。その時は今の自分よりもっと成長し、今よりも堂々としていられるといいなと一人願ひ、日々頑張ろうと思ひます。

(11月9日) 神奈川 T・M 26歳 男性

こんにちは。私は今回初めて高知に来ました。いい

こんにちは。龍馬さん天国で元気に暮らしていらっしやいますか。貴方が今の日本を見たら何とおっしゃるでしょうか。龍馬さんの目指していた世の中になつていますか。今日はずっと来たかったここにくることができました。福岡から来たのですよ。昔は「歩く」しか方法が無かったのですが、今は新幹線やら車やら飛行機やら、貴方に見せてあげたいです。便利な世の中になりました。私は今年二十歳です。成人の名に恥じぬ様、これからの日本を担ってゆく者として精一杯やりま。どうか見守りくださいませ。

(10月14日) 福岡 Y・T 20歳 女性

和歌山から来ました。僕も小さい頃、勉強ができなくて弱虫で、友達とケンカをしてよく泣かされていました。剣道をやれば龍馬のように強くなれるのかもしれないと思い始めました。龍馬より年上になつて初めて龍馬に会いに来ることができました。僕の子どもは、今小学校四年生ですが、小さい頃の龍馬のように時々おねしよをします。そして小さい頃の僕のように勉強ができなくて泣き虫です。でもいつか龍馬のように強くて優しい男になつて欲しいと願っています。見守っていてください。

(10月14日) 和歌山 K・U 38歳 男性

いつから坂本龍馬という人物に魅了されていたのかは覚えていません。中学二年生のときの教科書やプリントを見ると、龍馬がでてくるページに印を

(11月17日) A・U 女性

龍馬さん、また来てしようたがじゃあ！生誕祭とハンドンハンドに参加し、やっぱり龍馬さんはみんなに愛されちゃうがや！岡山の地で森館長や北海道坂本龍馬記念館の館長とフェイスブックでつながり、しかも全国の龍馬さんファンの方々と！龍馬さん、フェイスブックなるものはちつく面白いですよ！ほいたら、また来るき！

(11月17日) 岡山 R・F 55歳 男性

中学一年生のときに一人旅をして、そのときお世話になつた藤本さんに会いに高知まで来ました。今回で四回目です。今回お世話になつた高知新聞社の方をはじめ、多くの方に感謝したいです。そして大学四年のときの拜啓龍馬殿を見つけたことができてとてもうれしいです。次に来るのは何年後かな。今夜は藤本さんと飲みます。楽しみでならない。

(11月30日) 静岡 T・H 32歳 男性

私の夫は大、大、大の龍馬好きです。今日は私の夫は来れませんが、次回、いつか必ず一緒に来たいと思います。いつまでも夫婦として暮らしていきたいからだろとお龍馬さんの分まで、私は夫と共に歩み続けていきたいと、今日改めて思いました。ありがとうございます！

(12月18日) 佐賀 K・K 57歳 女性

宇宙人？

毎日のように、龍馬発信。を続けているのは北海道のAさん。その日出会った人にランダムに聞く。「あなたにとって龍馬は？」と。平成12年1月から同13年11月までの間に得たメッセージはすでに177件に上る。答えを貰うたびにメールで私に知らせてくれる。メールは挨拶から始まる。例えば

「おはようございます。北海道は肌寒い日が続いています。北広島市勤務のKさんに龍馬への思いを聞いてみました。広い視野を持ってよく考える人。沢山の人と会話のできる人。北海道からの龍馬発信 続けていきます。 A」

龍馬についての感想は色々である。思いやりのある人。先人の知恵を受け継いで自然を大切にしたい人。カッコーイイ人。今の時代についてほしい人。凄腕の達人。皆さんそれぞれ龍馬の人格を言い当てている。こんなのがあった。「大いなる宇宙人」になにに？と疑問を持つより先に、うーんなるほど、と納得させるのが龍馬たる所以であろう。

宇宙人。と言えば、宇宙人絡みのお話の一つ。11月のある日、龍馬記念館に、宇宙人。とニックネームをいただくお方、その、鳩山由紀夫、元総理がお越しになった。来高目的は高知市で開かれた会の講師で、時間を見つけての来館だったが、学芸員の説明を熱心に聞き見学された。最後のシエイクハンド龍馬さんとの握手には力がこもっていた。その熱心さに気が緩み、ちらりうわさの「宇宙人」の話を持ちかけると「龍馬さんも宇宙人ですよ。ふふふ」と屈託ない。そして握手の後、丁寧に手を合わせてお辞儀のごあいさつで締めくくった。減多に見られぬ丁寧さにこちらの頭が下がっていた。



しっかりと握手をかわす鳩山元総理

ここは館長の部屋 森 健志郎

10月28日、定例の龍馬記念館運営協議会が開催された。今年度最初の開催となった今回の会議では、記念館より平成24年度事業の報告とともに、現在進行中の25年度事業についての説明をおこない、各委員との間で質疑がなされた。

今後の事業については、薩長同盟や大政奉還、龍馬暗殺など、幕末の大きなできごとから間もなく150年の節目を迎えるにあたり、記念館がどのような事業を予定しているか、という質問が出された。これに対し記念館側は、鹿児島や山口などの関連機関との連携を考え、早くから計画を進める予定である旨回答した。さらに記念館側は、従来県との間で話し合われてきた龍馬記念館のリニューアル計画について、検討委員会を設置し、基本構想立案に向けて近く始動する予定であることを委員に報告した。

なお、長く当運営協議会委員を務めてくださった永国淳哉氏が、9月21日に逝去されたことが席上で報告された。氏は歴史研究者の立場から、これまで数々の有益な助言・情報を記念館に寄せてくださった。この場を借りて、当館の運営にご協力くださったことに感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

運営委員会 平成24年度事業の報告・今後の事業

フェイスタック、ブログ、車、飛行機、新幹線。ペリーの蒸気船に日本国民が驚き恐れていた時代に、いち早く船を使つての運輸業を思いつき、移動手段としても船を使つた龍馬なら、きつとうまく使いこなしてどんな新しいビジネスを始めたことでしょうか。龍馬を慕い、いつも龍馬の存在を身近に感じている皆さんのメッセージからは、こうした現代のアイテムを龍馬に教えてあげようという「愛」を感じました。龍馬は本当に幸せ者ですね。

編集者より

尾崎 由紀

リアルに幕末志士ら50人 日本画「龍馬・志士の群像」を寄贈 徳島の仏画家江本象岳氏

坂本龍馬記念館はこのほど徳島県在住の仏画家・江本象岳氏から、龍馬を中心に50人の幕末の志士たちを描いた日本画「龍馬・志士の群像」の寄贈を受けた。早速、地下2階展示室に展示、志士たちの繊細な表情表現が人気を呼んでいる。

この作品は縦715mm×横1310mm。懐に万国公法を携えた龍馬を中央に、向かってすぐ右側最前列には龍馬の師、勝海舟が地球儀を指して座り、左側では河田小龍が絵筆を握っている。半平太、西郷隆盛、桂小五郎、乙女ねえやん、もちろん妻のお龍も。写真から描かれた人物は、各々の特徴が生かされている。また現存の写真の不確かな人物、例えば千葉重太郎は剣道着を付け、顔を手ぬぐいで拭って隠しているし、また、写真のない岡田以蔵は横顔である。京都見回り組に至っては、顔はなく膝下と抜かれた刀が画面左端からチラッと見えているだけ。江本さんの“遊び心”がうかがえる。

「龍馬関係の本を読んでいると実に多くの人物が登場し頭が混乱してくるでしょう。そこで龍馬を中心に、集合図があったらと思って」とこの絵の制作動機を笑いながら話した。

「この前にじっと立っていると、夫々の人物から話し声が聞こえてきそうですね」「幕末が一目瞭然、気配が伝わってきます」など入館者の声は色々。ただ、一様にそのリアルさに驚き、感心していた。

江本さんは「次の作品にかかっています。“海援隊士面々”です。4月からのここで予定している個展には間に合わせます。楽しみにしてください」と話していた。

中村 昌代



作品「龍馬・志士の群像」

「幕末の志士人気ベスト10」展

一人で総得票の半分超える

新年の“海の見える・ぎやらしい”は昨年の12月から開催している「幕末の志士人気ベスト10」展後期を1月31日まで開催している。

この展覧会は、当記念館の入館者アンケートに「幕末のお気に入りの人物を教えてください」という項目があり、その集計をベスト10としてパネル写真で発表しているもの。今回は2013年4月から10月までの7ヶ月間の集計2,338票である。ベストテン入りする人物は、毎回微妙に入れ替わっている。その年の映像やテレビ番組など色々な影響がある。例えば19位にはNHK大河ドラマの影響だろう「新島八重」が入った。

5位高杉晋作(74票)、4位西郷隆盛(76票)、3位ジョン万次郎(140票)、2位勝海舟(160票)、そして不動の1位は坂本龍馬だがその票数が桁外れである。1,371票、一人で全体の半分以上を占めている。因みに、20位はあの乙女ねえやん、坂本乙女で9票である。天国で「龍馬、一人で取り過ぎじゃあないかね」と乙女ねえやんが笑っているかも知れない。

2008年から開催しているこの展覧会も9回目を迎え、今回は初めて20位までを展示した。さて、あなたの一票はどの人物へ？

中村 昌代



会場展示風景

★海の見える・ぎやらしい★

入館状況

2013年12月20日現在(開館以来8,028日)

- ◆総入館者数 3,478,008人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2013年度最多入館(2013年5月4日) 3,087人
- ◆2013年度最少入館(2013年12月19日) 49人

編集後記

世情穏やかならぬ師走。それだけに新年号の内容は新しい年への思いも込めて盛りだくさんとなった。11月「龍馬月間」は朗読コンサート、ハンドインハンド、手筒花火などイベントが続いた。その原稿にまたその時を思い出した。しかし館にとって2013年最大の出来事と言えば、開館以来20年を超えた館のリニューアル構想に手がかかったことだろう。龍馬への熱い思いは、不安定な世相の中ますます強くなっている。新年。スタートラインに立った気持ちだ。飛騰の全力を上げて龍馬発信！。今年もよろしくお願いいたします (モ)

館だより「飛騰」第88号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 発行日 2014(平成26)年1月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
 発行 高知県立坂本龍馬記念館 http://www.ryoma-kinenkan.jp
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
 入館料 一般500円・高校生以下無料
 身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
 戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

私のテーマ

世に出る“塚様”

お墓と私(上)

今久保 約雄



お墓との係わり

幼き日

日陰に入りて

墓碑を見ん

古希になりても

訪ずぬは碑なり

物部川の河口より八幡上流の右岸は、戦国時代に安芸氏・山田氏、長宗我部氏たちが争っていた荒蕪の平野であった。

江戸時代の初期、山内家は宰相の野中兼山に命じて、新田開発を奨励し香長平野三千ヘクタールを拓いている。

三五の年前に拓けた農地の中には、川石を重ね置いた無縁仏の塚様が多くあった。その塚様の東限は、乱世の頃に三氏が争って討死した人たちの墓である。

わたしは十才ぐらいから、夏休みには稲刈りの手伝いをしていた。水田にある塚様を、無意識のうちに見ていたし、小休止のときには、その隣にある共同墓地の日陰にいた。

共同墓地にはたくさんさんの墓があった。その中の、特別な墓に強く惹かれていった。その墓とは、太平洋戦争での戦死墓である。墓所は、山石を切込接ぎで一・二mに積み重ね、その面は三・三mと

広く、石段を上ると三段の台石で、家紋が光り、墓碑が建っていた。

正面は陸軍の階級、そして名前を刻み、階級の右は勲〇等、左は功〇級となつて、更に左面から裏面、右面へと、その出生、学歴、軍歴、終焉の地〇歳とある。そういった大きなお墓の日陰が、わたしの好きな場所であった。生家近くに戦死墓地は四基あつて、その造りは全て同じであつた。

生家から一番近いのが南に僅か三十m、日常的に見ていたので、無意識のうちにお墓に接していた。今でこそ、春秋彼岸の英霊墓参の慣習はなされていないものの、わたしの心には、今を深く残っている。

英霊の

勇士ありてぞ

現世の

平和あらんや

この碑に出づん

歴史に目覚める

昭和四十年代初め、高知新聞夕刊に、土佐の「城址を訪ねて」という連載があつた。

内容は、土佐の世に小豪族や地頭たちが山城や出城、砦を築き自らの版図を守つた、その盛衰を順次紹介したものだつた。

連載は進み、岡豊城、岩村城、楠目城、烏ヶ森城と。岩村城はわたしの生まれた村の城だつたし、いずれもがごく近くの城址だつた。

特に烏ヶ

森城の城

を廻つて

の攻防戦

には、塚

様のこと

が克明に

書かれて

いた。わ

たしが古

老たちが

ら伝え聞

いた話と

一致して

いた。

小学校

の通学路

に沿つて、

氏神様が

ある。そ

こは小学

生のわた

しには遊

びたい所

でもあつ

たが、大人から「とても偉い神様

だから、そこには行かれん」と注

意があつた。新聞の連載は、長宗

我部元親のことに触れ、三男津野

孫次郎親忠にまで及んで、その偉

い神様が三男親忠だということが

分り、大人の注意の意味が分つた。

野中兼山は、普請奉行として新

田開発を推し進めた。その際、古

いお墓は塚様として農地に残せば、

大切に扱おうと信じた兼山先生のお

慈悲を持った差配に心を打たれた。



300～400年前から今に残る無縁仏の“塚様”(香美市土佐山田町戸板島) 2013/10/30

余談として、舟入川に沿う兼山先生の隠居跡に、終焉の地としての碑がある。自宅から北西へ約1kmのところである。

塚様や

農地以前の

地主なり

肥やせよ土地を

ひもじてならぬ

次号へつづく

美刀剣の完成で研ぎ 黒田守寿さん

「話題人」インタビュー

若い世代に刀の魅力を伝えたい



日 本刀の世界は深い。武士にとって刀は魂である。黒田守寿さんは、刀剣研師では四人しかいない人間国宝（重要無形文化財保持者）の一人・小野光敬氏の下で10年間修行し、以来50年近く刀剣を研いでこられた職人。厳しい目を持つ刀剣専門家や愛好家の間で、信頼が厚い人である。正月紙面は、伝統的な世界で生きる黒田さんの話で飾りたいと、福岡市博多区のご自宅兼作業場を訪ねた。作業場（細工場）の中の八畳ほどの板の間で刀を研ぐ黒田さんには、応接間でお話を伺うときは一味違った存在感が漂っていた。

です。私は横で見ただけですが、印象的でした。ともかく研ぎ終わって依頼主に渡す時、喜んでいただいたときは嬉しいですね。また、宇佐神宮の仕事をしたときなど、一般の方が入れないような所まで行くことができたことも思い出されます。

いい加減な仕事はしない

いろいろな経験と、本物を見る眼。それは美術品全般にも必要なことですね。刀剣を研ぐということは自分に対峙する作業でもあるのです。確かに研ぐという作業は厳しいものですね。刀に負けてはいけません。刀工が命がけで作った刀ですから、刀に負けないように研がなくてはならない。刀は完璧を求めます。つまり、研ぎは刀が作られた時代や形に忠実に、本来のままを蘇らせることが求められます。

そのためには基本的な知識はむしろ、姿、金筋、地形、地鉄、刃紋などを知り、鑑定眼を鍛えなくてはならない。



研ぎ場に流れる音と空気

これが作業場ですか。独特な空気がありますね。気持ちを引き締まるようです。研ぐときの音も刀の重みなのか初めて耳にする重厚さを感じます。

そうですね。私は慣れているせいか、音はあまり気にしていませんけど。研ぎが進むと音はなくなり、仕上げの研ぎなどは、砥石を薄く細かくして和紙に貼ったもので、研ぎ跡を消していくような作業ですからね。

これは薩摩の幕末刀です。1本の刀で10日前後、1日7、8時間研ぐのが普通ですね。

思った以上に根気のいる作業ですね。砥石の多さにもびっくりしました。冬でも素足なのですか。

日本刀は、刀工の鍛錬と研師の技術によって完成するといわれます。鍛える、ことと、研ぐ、こととで刀の姿が決まるわけです。砥石も作業の過程で、荒いものから細かい目のものへと変わっていきますから。

刀は純鉄という全く不純物のない鉄からできています。そのため刀作りは鉄を何度も何度も折り返しという作業をして、鍛える、わけですね。そうすることで、鉄は純金のようにやわらかくなり、輝きが出るのです。鉄も人も熱い、若いうちに鍛えなさいね（笑）。そんな鉄の性質を分かっていたうえで研いでいきます。もちろん、年

中素足です。

刀は研がれて生き続ける

1時間ほど作業場を拝見し、研ぎということを実際のものとしてみることができました。改めてお話を伺いたいと思います。率直な質問ですが、研ぐってどういうことですか？

刀は放つて置くと錆が生じて腐食します。腐ると刀は形を失っていく。ボロボロに壊れていくわけです。しかし、研いで手入れをしていけば何百年でも、1千年であっても、美術品としての価値を持つことができます。

研ぐということはまず錆をとる事です。次に、時代や形に合わせて、刀の特長を出すように光らせる。いや、その特長以上に良くして光らせることも重要です。これが研師の腕を試される場所ですね。

刀鍛冶の技術が確立した鎌倉時代後期から南北朝時代の刀は見事です。そういつた古い刀を研ぐときは、時代や当時の形に忠実に研ぎます。

しかし、現代刀のような新しい刀は、研ぐことによってその形を完成させるといふ役割もあります。

黒田さんは十代で研師の世界に入られたということですが、



刀剣から時代への思いを馳せる

お隣にいらつしやる奥様、千恵美さんも刀や研ぎについてお詳しいように見受けられます。日頃思うことがおありでは…。

そうですね。結婚して37年。結婚するまで私は刀剣や研ぎなんてことは知りませんでした。素人の私でも長年主人の仕事を見ていたうち、日本刀の魅力を一人でも多くの方に伝えたいと思うようになりました。

刀は武器としてあるだけでなく、日本人の魂、素晴らしい文化だと思っています。これだけ見事な美術品は世界中にないのではないのでしょうか。

一途に地道に研ぎ職人として精

長い歳月の間に得たものはたくさんありでしょうね。

本日の研ぎができるまでには10年かかります。私も師の小野光敬先生の下で厳しく苦しい修行を重ねたおかげで、今があります。

人間国宝になるには国宝や重要文化財など、貴重な刀剣を数多く研がなくてはなりません。光敬先生は正倉院の国宝100本以上を研ぎましたし、本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝である各先生も同様です。現在、国宝級の刀剣はほとんど研がれていまずので、研ぐ機会は少ないでしょうね。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。これは大事なことです。

国宝や重要文化財など上質なものを研ぐことで、刀の良し悪しが見分けられます。鑑定眼を養うためには、いいもの、本物を見ないといけない。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼

進する主人の姿からもそれを感じます。また、この博多という土地柄から歴史や坂本龍馬についての興味も持っています。

いいお話ですね。黒田さんからも最後にひとことお願いします。

私も同感ですね。若い愛好家が増えて、刀を買って、知って、大事に次代に伝えていってほしいと思います。刀剣の魅力は、長い日本の歴史の、それぞれの時代に思いを馳せることができるということです。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がっていた。ふと、黒田さんが長い歲月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のような千恵美さんの美しさではないかと思っただけ。雨上がりの空が眩しかった。

profile

黒田守寿 くんだ もりとし
本阿弥流刀剣研師。
1948年大分県臼杵市生まれ、福岡市博多区在住。父・寿生氏も研師。
65年に人間国宝（本阿弥流重要無形文化財保持者）故・小野光敬氏に弟子入り。夏は朝6時、冬は朝7時から夜10時まで、10年間修行し、福岡で独立。宇佐神宮、石清水八幡宮、春日大社、九州国立博物館、大英博物館、メトロポリタン博物館など国内外の刀剣5千本以上を研いできた。
日本美術刀剣保存協会無鑑査。



前田 由紀枝
(まえだ ゆきえ)
現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸主任

「ほれ話」 犬歩棒当記(十六)

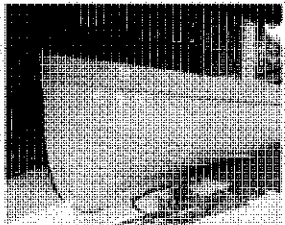
雨乞いの名歌

京都国立博物館 宮川 禎一

「かの小野小町が名歌よみでも、よくひでの順のよき時ハうけあい、雨が降り申さず。あれハ北の山がくもりてきた所を、内々よくしりてよみたりし也」といふ文章は坂本龍馬が禁門の変を前にした緊迫感を背景に「時勢を良く見て、その時期の満ちるのを待て(今はまだ倒幕拳兵には早い)」という意味で書いた手紙の冒頭部分である(元治元年六月二十八日付、乙女あて。土佐山内家宝物資料館蔵)。とても重要な手紙だ。小野小町が詠んだ雨乞いの名歌とは「千早振る神もみまさは立騒ぎ天の戸川の樋口開けたまへ」というものだ。確かに効きそうな和歌である。

この龍馬の手紙とよく似た話があるので記して置きたい。大分県南部、竹田市街の高台にある広瀬神社は日露戦争の際に旅順港で戦死して軍神となった広瀬武夫を祀る社である(昭和十年創建)。昭和四十年頃にこの広瀬神社の二代目の宮司をつとめたのは広瀬末人という人であった。彼は武夫の身内である。正確には広瀬武夫の兄勝比古のひとり娘である馨子の婿(龍馬にたとえるならば兄権平のひ

たり娘の春猪の婿清二郎)であった。海軍中將であった広瀬末人氏は晩年にゆかりの竹田で広瀬神社の宮司となったのだ。



戦艦朝日のカッターポート (広瀬神社境内の広瀬武夫記念館下に展示中)

竹田での彼の評判は「広瀬神社の宮司さんの雨乞いのご祈禱はとても良く効く」というものであった。しかしながらその実態は、ご想像のとおり、海軍時代に洋上の艦船の上で風と雲の動きから天気の変化を予知する能力が鍛えられ、山国竹田でも風向き雲行きを読んで、雨が降りそうなタイミングが分かったうえで雨乞いの祝詞をあげた(なのですぐに雨が降る)ということだったのである(高城知子著『広瀬家の人びと』より)。

広瀬宮司の雨乞いの祈禱はまさに小野小町の和歌だったのだ。また歴史の動きと天気の変化はよく似ているということかも知れない。

コラム・龍馬のこと

「永国淳哉サンをしのんで」

現代龍馬学会長 片岡 雅文

県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会の初代会長で、その後も顧問を務めてくださっていた永国淳哉先生が昨年9月21日、73歳で急逝されました。

2009年に発足して5年になる現代龍馬学会は、先生が会長を引き受けてくださったからこそスタートできたのであり、今日まで歩んでこられたのも、先生が顧問としてずっと見守り、支えてくださっていたからです。引きつづいて、これからも指導していただくはずが、あまりにも急にこのようなことになってしまい、私どもには言葉がありません。なにより、先生ご自身、無念でいらっしやることでしょう。



故永国淳哉氏

学会の発足にあに置いておられたこおける新しい龍馬像でした。そのことにいろいろなイメージです。2009年に開研究発表会で、龍馬と和歌をめぐって興味深い所感を述べられたのも、その一環だったかと思われま

たって、先生が念頭との一つは、現代にを追求していくことついて、先生は既に、を持っておられたよかれた学会の第1回

いま振り返ってみますと、先生の土佐史研究の強みは、長年積み重ねてこられた英語力にありました。ジョン万次郎を現代によみがえらせた『ジョン万エンケレセ』や『雄飛の海』、あるいは馬場辰猪の悲劇を浮き彫りにした『遠い波濤』など、アメリカやイギリスへも足を伸ばし、入念に取材して書き上げられた著作は、先生独自のもので、他の研究家の追隨を許しません。

龍馬についても、英語や欧米文化とのかかわりのなかで、これまでになかった人間像を構想しておられたに違いありません。かえすがえすも残念なことです。

あらためて、心からご冥福をお祈り申し上げます。

“話してみるかよ”

「募金活動をやろう！」

現代龍馬学会員 江上 英治

12月7日、今年最後の現代龍馬学会の理事会に出席した。集まりの焦点は来年の課題である。先に県が発表した坂本龍馬記念館のリニューアル基本構想検討委員会の立ち上げが話題の中心となった。築20年を越えた建物は、海に乗り出す外観は入館者にとって最高の評価を受けているが、一方、潮風、太陽の強さは博物館泣かせという。おまけに「記念館はながされる!」。館長の言葉に驚いた。なんでも龍馬記念館の立っている位置がよくないらしい。岩盤に挟まれた埋立地だから、マグニチュード8.2クラスの地震がきたら、海に向かって流れていくというわけだ。

大変である。人もそして貴重な資料類も。

検討委員会の論議はここからがスタート、やや遅きに失した感はあるが「龍馬の土佐」からすればこれは高知県にとって最優先の課題だと思う。収蔵庫は岩盤の上に移さなければなるまい。となると、展示室も。必然的に“別館構想”が浮かんでくる。現在の龍馬館は、その立地条件からすればパフォーマンス館として残すとい。夢はいくらでも膨らんでいく。

そう、課題をクリアしていくには多大な予算と時間が必要。しかし、記念館のもともとの生い立ちを思い出してほしい。商工会議所の青年部の募金活動から出来上がったものではないか。「募金活動をやろう!」。今回もそんな声が増えていいような気がするのだが。“龍馬さんの笑顔”が見えるぜよ。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp